

という和名を提案したい。

日本の分布は本州，九州ではあるが，灯火や捕虫紙トラップから得られており，かなり広く分布しているものと思っている。

確認標本：1 ex., 熊本県玉名郡三岳, 16. VIII. 1986, 城戸克弥採集；1 ex., 大分県速見郡日出町佐尾(灯火), 7. VII. 2008, 岡本 潤採集；1 ex., 兵庫県豊岡市出石町, 22. VII-21. VIII. 2009 (捕虫紙), 山下雅司採集；1 ex., 大阪府大阪市東成区, 7. VII-8. IX. 2011 (捕虫紙), 山下雅司採集。

最後になったが，標本をいただいた岡本 潤氏，城戸克弥氏，確認していただいた幸形 聡氏，お世話になった Ottó Merkl 博士，益本仁雄博士に厚く御礼申し上げる。

引用文献

今坂正一, 2001. 島原半島の甲虫相 3. こがねむし, (52): 56-73.

Leschen, R. A. B., Beutel, R. G. & J. F. Lawrence (edit.), 2010. Handbook of Zoology, Coleoptera Volume 2: Morphology and Systematics (Elateroidea, Bostrichiformia, Cucujiformia partim). 786 pp. Walter de Gruyter, Berlin.

Löbl, I. et al., 2008. Diaperinae. In Löbl, I. & A. Smetana (eds.), Catalogue of Palaearctic Coleoptera, 5, pp. 303-319. Apollo Books, Stenstrup.

(平野幸彦 250-0865 小田原市蓮正寺585-29)
(三宅 武 879-5511 由布市挾間町古野1046-17)

【短報】ガムシの極小個体の記録

ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky, 1854 は，主にため池や水田などの止水域を好んで生息しているガムシ科の水生甲虫である。佐藤(1985)によると，本種の体長は33-40 mm とされており，同属のコガタガムシ23-28 mm とは，後胸腹板突起の長さで体長の違いによって区別することができる(林, 2009)。筆者は，本種の極小個体を採集したので，ここに報告する。

2♂, 岡山県真庭市蒜山吉田, 2. X. 2011, 筆者採集・保管。(27 mm: 図1, 30 mm)

本種は，稲刈り後の水田に残った水たまりから得られた。最初はコガタガムシだと思ったが，後胸腹板突起の長さが短い(図2)ことから，本種であると同定することができた。あまりにも小さいため，サイズを計測してみると，小さい方の個体は27 mm 後半であり，大型のコガタガムシに近いサイズであった。採集地の近辺では，ため池な



図1-2. ガムシの極小個体。1, 全形; 2, 後胸腹板突起。

どの止水域がほとんど残っておらず，水田に水が無くなってからの生息地が非常に少ない。このため，この地域の個体群はとても貧弱な生息環境の中，細々と生き延びているのであろう。本種を含む，止水性水生昆虫の生息環境の悪化を強く感じた。

末筆ではあるが，原稿をご校閲いただいた愛媛大学ミュージアムの吉富博之博士に厚くお礼を申し上げます。

引用文献

林 成多, 2009. 島根県の水生ガムシ科. ホシザキグリーン財団研究報告, (12): 87-121.

佐藤正孝, 1985. ガムシ科 Hydrophilidae. 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝(編), 原色日本甲虫図鑑II, pp. 209-216, pl. 38-39. 保育社.

(渡部晃平 717-0513 真庭市蒜山下和1077
真庭市津黒いきものふれあいの里)

【短報】愛知県から確認されたテツイロヒメカミキリ

テツイロヒメカミキリ *Ceresium sinicum* White, 1855 は我が国では，本州(関東以西)，九州，五島列島(中通島)，甌島列島(下甌島)から知られている。しかし分布は局地的で，京浜，阪神，北九州地域などの都市部とその周辺に偏っていることから，外国からの移入種の可能性が高いことが指摘されている(新里, 2007)。本州では，京浜地域と阪神地域における分布は良く知られているが，その中間の中京圏からはこれまでに知られていなかった。筆者らは，愛知県日進市内において，次のように本種を確認したので報告する。

12 exs., 愛知県日進市野方町神明社, 18. III. 2010 (加害木採集), 23. VI. 2010 (羽化脱出), 小西宏明採集(小西宏明, 長谷川道明保管); 1 ex., 同地, 22. VI. 2011, 小西宏明採集・保管。

前者は，神社脇の粗朶置き場にあったアカメガシワの枯枝(直径2 cm, 長さ約1.5 m)のうち加害の目立つ部分約50 cm を持ち帰り，ケースに保

管し羽化脱出したもので、後者は神社脇の粗朶置き場のピーティングで採集したものである。

本種は、本州産と九州産では前胸背や上翅の形態などに違いがあることが知られている(新里, 2007)。手元にある東京都産および佐賀県産の標本と愛知県産の標本を比較したところ、前胸背などの特徴は東京都産のものによく一致した。

中京圏は、京浜、阪神には及ばずとも多くの昆虫研究者が在住しており、その中でも愛知県は、カミキリムシ相が比較的良く調べられてきた地域である。特に愛知県のカミキリムシ相解明の気運が高まった1970年代から80年代にかけては熱心に調べられ、京浜、阪神地域に分布しているながら、中京圏での記録がなかった本種は、注意が払われて探索された種のひとつであった。こうした背景に加え、成虫が強い走光性を示し、幼虫の加害木も比較的発見しやすい本種が、これまで発見されてこなかったことは、最近になって本種が他地域から移入された可能性を示唆している。今後、中京圏での動態を注視すべきであろう。

引用文献

新里達也, 2007. カミキリ亜科, pp. 252-281, 424-512. 大林延夫・新里達也(共編), 日本産カミキリムシ, 818 pp. 東海大学出版会.

(小西宏明 470-0154 愛知県東郷町和合ヶ丘3-2-15)
(長谷川道明 441-3147 豊橋市大岩町字大穴1-238 豊橋市自然史博物館)



図1. テツイロヒメカミキリ(愛知県産)。

【短報】トカラ列島小宝島におけるタマムシ科の採集記録

筆者は、2011年7月にトカラ列島小宝島を訪れ、タマムシ類の調査をすることができたので、その結果を報告する。報告に先立ち、今回のトカラ列島での調査・採集の許可を頂いた十島村役場の方々、および親切にご協力頂いた島民の方々に感謝申し上げる。

秋山・大桃(1997)の日本産タマムシ科チェックリスト、およびその後の筆者の知見でも、これまで小宝島におけるタマムシ科の採集記録はないと思われる。訪れた小宝島は植生が貧弱で、シイやカシの木の類は見当たらず、トカラ列島では普通に見られるヤクシマクリタマムシやクリタマムシ(服部, 2010a, b)なども得られなかった。唯一採集できたのは、やっと見つけたマツから得られたウバタマムシ1種であった。

ウバタマムシ宝島亜種 *Chalcophora japonica takarajimana* Y. Kurosawa, 1974 (図1)

2♂♂, 鹿児島県鹿児島郡十島村小宝島, 3-5. vii. 2011, 筆者採集.

小宝島のウバタマムシは、渡瀬線よりも北、悪石島以北の日本各地に分布する名義タイプ亜種 *C. japonica japonica* に比べて隆線が強く隆起しており、かつ背面の光沢が強い点で宝島亜種 *C. j. takarajimana* と同定した。Kurosawa (1974) によれば、宝島亜種は、鞘翅の縦隆線間に不明瞭な小隆線が存在すること、および縦隆線間の点刻は密ではないという特徴をもつことで名義亜種や台湾亜種のグループに属し、奄美・沖縄亜種 *C. j. ohshimana* (アオウバタマムシ) とは明瞭に区別されると言う。

しかし、今回得られた小宝島の個体は、宝島産の個体に比べて太短く、色彩も宝島産は背面全体が銅赤色または緑色の光沢を持つ個体が多いのに対して、小宝島の個体は背面の光沢がより強く、前胸背の中央部分が赤銅色の光沢を持ち、鞘翅は体軸と並行な光に対して緑色の光沢を持つ。これらの色彩的特長はむしろ奄美・沖縄亜種に近い。



図1. ウバタマムシ宝島亜種♂(小宝島産)。